

# 記事との出会いと学びから伝え手を意識した新聞づくりにつなげた子どもたち

指定校 1 年次 木島平村立木島平小学校 山崎 秀樹  
浦野 紫

## 1 本校での新聞活用（NIE）の現状

木島平小学校は、平成 22 年度より北部・中部・南部小の三校が統合して新しく開校した学校である。学校教育目標を、今年度より「心と体をひらいて学ぶ子ども」として子どもたち同士がお互いに学び合うことを大切に日々の授業を行っている。その中で、特に大切にしていることは「聴き合う」ということである。「自分がわからないことを聴く」「友達が何を言おうとしているのかを考えながら聴く」など、互恵的関係の中での学び合いを求めている。

「聴く」ことを大切にする中で、言語の豊かさや対話的コミュニケーションの重要性を感じている。新聞活用には大きな価値があると考えているが、実際の子どもたち実態は、「テレビ欄」「四コマ漫画」だけを見ている子どもたちが多く、なかなか記事の内容と触れる機会が少ないのが現状である。さらに、私たち自身も新聞を授業の中に積極的に活用していることは少なく、社会で起きていることと子どもたちが関わることについては、消極的な部分があった。

そこで、今年度、低学年から高学年へ移行する 4 年生を中心学年に、「新聞と関わること」を中心に自己を見つめる活動を行うことを考えた。NIE に関わる活動を始める前に、子どもたちに新聞について聞いてみると「テレビ欄をよく見る」「4 コマ漫画はみるけど、後は見ない」「自分の家は、新聞を取っていないよ」という返答がきた。家庭でも新聞の記事の内容が話題になることが少ないことが見えてきた。

それは、活字にも触れていないことにつながると考え、廊下に新聞を置いていつでも見られる環境にしたり、授業の中に積極的に取り入れるようにしながら、できることから活動を始めようとした。「毎日届けられる新聞の記事は、社会の動きが情勢に分かりやすく載せられている事実を子どもたちに知らせたい。」そんな思いを強くに N I E の活動に取り組み始めた。

## 2 実践のねらい（育てたい力）

- ・新聞にふれることを通し、語彙数が増えたり言葉の豊かさに気づいたりしてほしい。
- ・社会事象に関心を持ち、自身と対話しながら考える経験を得てほしい。
- ・新聞を作ることを通して、読み手にわかるような文を書くことの必要性を感じ、書きたいことをはっきりとさせて文を構成できるようになってほしい。

### < NIE の実践を通して >

相手の考えていることや感じていることを自分なりに解釈し、自分はどう思うのか・考えるのかなど、情報を選択して活用する子どもたちに育ててほしい。

## 3 研究の概要

### (1) 利用した新聞と利用期間

利用した新聞	信濃毎日新聞、朝日新聞、毎日新聞 読売新聞、産経新聞、日本経済新聞	利用した期間	7 月～11 月（8 月除く）
--------	--------------------------------------	--------	-----------------

## (2) 新聞と関わるために実践してきたこと

### ① 廊下への新聞置き場の設置

4年生廊下に新聞置き場を設置。いつでも、新聞を見られる場とした。

→新聞が身近にあるという環境が、新聞を見ることへの抵抗感をなくしてきていた。気になることがある子や休み時間にやることのない子は新聞を見ていることがあり、身近に見る環境が大切だということが示唆された。

### ② 週一回の新聞記事の切り抜きとそれに対する感想を書く活動

家にある新聞記事や学校の新聞置き場の記事を月曜日に持ちより、記事に対する感想を入れるようにした。

→取り組みはじめの時は、スポーツや鳥の紹介など身近な内容を切り抜きしてくる子が多かった。また、読めない漢字が多くなかなか内容を読みこなすことまでは難しかった。しかし、新聞になじみのない子どもたちにとってはスポーツなどは読みやすく、抵抗感なく新聞記事を見ようとするにつながっていた。

→約2ヶ月続けたところで、「社会で起きたニュース」と記事の限定を行った。それまでスクラップを行ってきたので、子どもたちは抵抗感なくニュース記事のスクラップへ移行することができた。

→人ごとにしないで自分の考えを書いたり感想を紹介したりすることで、切り抜いた記事に対して自分の考えを述べる子が増えてきた。



<7月のスクラップと感想>



<10月のスクラップと感想>

### ③ 社会科学習の中での取り組み

○信濃毎日新聞で特集された「青い金」を扱った水資源の現状とこれからについて考える。

→木島平村の水道水がすべてわき水を使っていることから、水が有限な資源であること

や貴重になってきていることを子どもたちに伝えたいと考えた。それまで、水は無限にあると思っていた子どもたちにとって、枯渇していく水資源の存在を知る機会となった。学習後、出しっ放しになっている水を自主的に止めるなど、水を大切にしようとする子どもたちの姿が見られるようになった。



○長野見学の事前学習としての活用  
「長野県の行政の具体を 新聞記事から知る。」

→新聞に掲載されている「観光部」「建設部」「農政部」などの具体的な取り組みを知ることができた。具体的な取り組みを知ることによって、長野県が自分たちのために様々な取り組みを行っていることがわかったようだ。反面、記事がなかなか見つからずに苦労した部署もあった。

#### ④道徳や国語の中での取り組み

○新聞記事の特集などから、道徳や国語で活用できそうなことを取り入れていった。

ー授業で扱った記事の例ー

- ・「いじめられている君へ」（朝日新聞特集）
- ・「ひまわりのたねいっぱいもらったからこんどあげるね」

（産経新聞一面 3. 11のその後）

→新聞には多くの方の意見が寄せられている。特集はメッセージが強く込められているため、それまで持っていた価値観を揺さぶられた子どもたちが多くいた。また、過去の自分や社会の出来事を振り返るきっかけとなり、一人ひとりが考えを深めることができた。

## 4 NIE 実践の内容

(1) 単元名「アップとルーズで伝える」

～八丈島の友達に「私たちを紹介しよう」（私たち新聞発行）～

(2) 授業クラス 4年1組（男子11名 女子13名 計24名）

(3) 単元を通しての願いや大切にしたこと

新聞を通して様々な活動を行ってきたが、「文章を書く」ということになるとまだまだ抵抗感があったり、文章が書けても自分本位の文章が多く、書いているうちに話の中心がわからなくなってしまったりする子どもたちも多かった。

そこで、教科書教材「アップとルーズで伝える」を窓口として、不特定多数の人にわかる情報を届ける新聞から、読み手に伝わる文章の書き方を学び、話の中心をはっきりさせ文を構成することを大切に扱った。また、中心題材として、子どもたちにとって身近で切実感があり、読み手がはっきりしているという条件を含んだ、来年度から交流を行う八丈島の4年生に向けた新聞作りを選んだ。自分たちの活動を記事にした「私たち新聞」を八丈島の友達へ送ることで、5年生になってからの交流を深めていくことにつなげたいと考えた。

(4) 単元展開の実際

時間	学習活動	学習内容・支援・子どもたちの様子 →子どもたちの感想や反応
1	<p>○八丈島の仲間へ私たち新聞を送るという目的を持つ。</p>	<p>○担任より、この夏八丈島で交流を始めた5年生を写した写真を見せる →なんだか、あまり楽しそうじゃない。 →笑顔がないよ。どうして、楽しそうじゃないの？ →（担任より、どうして楽しそうじゃないのか聞かれ）たぶん、初めて会ったから話すことがないんだと思う。</p> <p>○自分たちが5年生になってから、笑顔で始まらない交流になりたくないという気持ちを確認し、どうするか考えあった。 →手紙でも書けばいいのかな。そうすれば、話題がでてくるのかも。 →何か送る？でも、どうすればいいのかな。 →新聞？（担任が、どうしてと聞く。）だってさ、今まで新聞を書いてきたし、伝えるためには新聞がいいんじゃないのかなと思ったから</p> <p>○2月に八丈島の5年生がスキーをしにくることを伝える。担任より、そこで新聞を渡したらどうかと提案した。子どもたちは、「自分たちのことを知ってもらいたい」「初めてあったときでも、楽しく会話をしたい」という願いを強く持っていたので、「私たち新聞」を作ると決めた。</p>
4	<p>○「アップとルーズで伝える」を通して、考えを伝えるために大切なことを読み取ったり、考えたりする。</p>	<p>・「アップとルーズ」を読み大リーグの様子を流したニュースを見る。 →なんだか、遠くになったり近くになったりしているのかもしれない →教科書に書いてあるとおり、アップだとイチローの表情が見えるけどルーズだとよくわからない。でも、ルーズだと観客の様子もわかるよ →（映像に合わせながら）「アップ」「ルーズ」と言葉を紹介した。</p> <p>・文の構成について知る。 ・「アップ」と「ルーズ」という方法についてまとめる。</p> <p style="text-align: right;">＜グループ学習＞</p> <p>→アップは、近くの様子がわかるものだと思う。教科書にも「走る選手の様子がわくわかる」と書いてあるよ。 →アップとルーズは反対のことだよ。しかしって書いてあるから反対のことじゃないかな。</p> <p>※「しかし」という言葉に注目し、接続詞に興味も持ち始めたため、次の単元の「つなぎ言葉」の学習も一緒に行った。実際には、つなぎ言葉の種類を学習した後、新聞にどのくらい使われているのを見つけた。</p> <div data-bbox="1023 1579 1469 1908" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">＜つなぎ言葉を見つける＞</p>
	<p>○新聞は、どのように</p>	<p>・教科書の「新聞でも…」という文章から、新聞で使われている写真について考えあった。</p>

- 3 「アップ」と「ルーズ」を使っているのかを考える。
- ・5社の新聞の一面を見ながら、伝えたいことが異なっていることを学んだ。また、石原慎太郎都知事が退任を発表した日はどの新聞も同じアップの写真を使っていることを見合って、日本全体に知らせたい事柄がある場合は一面が同じようなことになることを考えあつた。
  - 本当だ。新聞によって記事が違ってる。
  - 石原慎太郎さんがやめたっていう記事は、たぶん日本の人たちが全員知らないといけないような大きなことだから、どの新聞もアップの写真を使っているんだと思う。
  - 東京のことなんだけど、東京って日本の中心だと思う。だから、全国の人にも伝えたいと思ったんだと思う。



※ここで、信濃毎日新聞が全国紙でないことに気づく。4年生の段階では新聞はどれも全国紙として配達されている認識が強かったようだ。

新聞記事の比較

- 3 ○「アップ」と「ルーズ」を使い分けを考える
- ・新聞記事と写真を別々にした学習カードを担当が準備し、記事から自分はどちらの「アップ」と「ルーズ」の写真のどちらを使うか考えあつた
  - ・記事の内容がわからないと写真を決められないため、お互いに相談しながら記事の内容を読み合っていた。新聞の考えがはっきりしたところで、考えの根拠となる部分を見せながら学級全体で伝え合った。

- 私は、右の記事は②の写真を使っていると思います。記事の中にはドリブルのことが書いてあるし、ピッチの様子も書いてあるからそう思いました。
- 左の記事はパスやシュートのことも書いてあるし、全体の指示も書いてあるから、①の写真がいいかなと思った。

<実際に使用した学習カード>

- ・子どもたちは自主的に記事の中心となるところに線を引き始めた。何が書いてあるのか、どのような記事になっているのかを考えるヒントとしていたようだった。

1

○「私たち新聞」に載せたいことを出し合う。

- ・担任が書いた新聞を参考に、八丈島の友達へ伝えたい内容を出し合った。今まで行ってきた自分たちの活動を振り返り、全部で20以上の内容が出された。
- 憩いの場（クラスで作った公園）のことは是非伝えたいな。
- 運動会のことや音楽会のことも伝えたい。
- 八丈島には高い山（担任が少し話をしたこともある）がないから、高社山遠足については書きたい。

8

○「私たち新聞」の記事を作る。

- ・グループで「私たち新聞」に載せる内容について検討し、記事執筆者を決めた。原稿としてかける内容が300文字程度であることを伝えていたため、何を伝えたいのかをはっきりさせようとしていた。
- 運動会の何を書けばいいんだろう？ソーラン節のことをやればいいのか。
- 先生、本当に300文字？足りないよ。池づくりのことを書けばいいのかな。

- ・自分たちで決めた記事を書き始める。300文字程度しかかけないことが、子どもたちを大困らせていた。
- 書いてみたけれど、これでいいのかな。
- 書き始めってどうやって書けばいいの？文をつなぎかたは？
- これでわかりやすくなっているのかな。

- ・子どもたちが記事の書き方について悩みを感じていたので、新聞記者の方に書き方を教えてもらうか相談した。
- 夏の時も新聞を書いたけど、そのときはよくわからないで書いていたからもう一度教えてほしい。
- 書き方がわからない。あと、夏ときは書かされていたから。今は自分で書きたいから、教えてもらいたい。

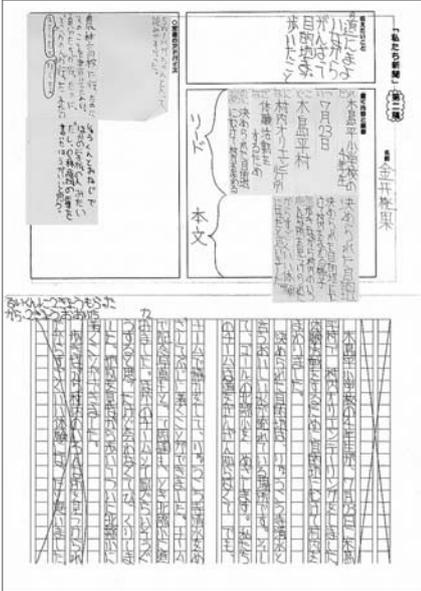


- ・信濃毎日新聞社の畑さんに来校していただき、新聞の書き方を教えてもらう。
- ・教えてもらった内容は5W1Hを意識して書くこと。また、八丈島の友達は木島平のことは全く知らないこと。新聞にはリード文というものがあり、本文では詳しくしていくことが大切だということ。
- リードという文があるのは知らなかった。
- 伝えたいことをはっきりとさせないとかけないことがわかった。
- 始まり方がわからなかったけれど、5W1Hを意識していけばいいんだと思った。

○友達にみてもらいながら、記事を書き上げる

- ・教えてもらったことをもとに、私たち新聞の記事を書き上げる。
- ・今まで一緒に記事を考えてきたグループとは別のグループに記事を読んでもらい、アドバイスをもらう。アドバイスをもとに最終原稿を書く。

→ねえ、この文「、」がないから読みにくいと思うよ。  
 →ここをかえればいいの？思い出した。ここ、リード文だったから、これじゃいけないんだ。  
 →自分じゃ気づかないところを友達が教えてくれて、わかりやすい文章になったと思う。



<使用した学習カードとアドバイスしている場面>

○「私たち新聞」を作る

- ・書き上げた記事をもとに写真を選んだり、見出しを書いたりする。
  - ・新聞を分担して書く。
- 見出しは結論だから、なんていう言葉にしようかな。



→記事にあう写真ってどれだろう。  
 →あいてしまったところに4コマをいれて読みやすくしようよ。

○活動を振り返る

- ・活動を振り返り、自分が学んだことなどを出し合う。
- 新聞作りをしてみても、相手に伝わる文を書くことって難しいと思った
- はじめは難しかったけれど、だんだんかけるようになってくると楽しいと思った。
- 新聞を作っている人たちが、わかってもらうためにアップとルーズを毎日繰り返していることに驚いた。私にとってすごく勉強になったし新聞のすごさとかよさがわかった。

4

1

#### (4) 研究のまとめ

実践のねらいに「相手の考えていることや感じていることを自分なりに解釈し、自分はどう思うのか・考えるのかなど、情報を選択して活用する子どもたちに育ててほしい。」と示した。

木島平村の子どもたちは、素直で明るく前向きな子が多いが、過疎化が進む中、少人数の人間関係で学んでいる。そのため、実生活と社会をつなぐ手段として、メディアの活用は欠かせない。

今年度の4年生を中心に NIE の実践を行い、必要と感じたのは「社会と子どもたちをつなぐ必要性」ということである。新聞記事を見ながら、全国で起きていることに興味・関心を持ったり意味を考え合ったりすることは、社会で起きていることを実感したり関係する人の意図を考えたりすることにつながったと考える。

また、「新聞を読む」「新聞を書く」ということを通して、言語を獲得したり活用したりすることへの意識が見られるようになった。「私たち新聞」完成後に行った読書感想文を書く学習では、一人ひとりが 5 W 1 H を意識していた。また、読み手を意識しながら書くことになれ、文の中に具体例を入れながら書く子どもたちが多くなった。

読み手を意識するということは、学校教育目標である「心とからだをひらいて学ぶ子ども」の具体の姿としては大きいと感じる。独りよがりではなく、社会の出来事や自分の身の回りで起きていることを直視して考え、読み手にもわかるように伝えることは、自分を理解してもらうことにもつながる。今後も社会と子どもたちをつなぐということを大切にしながら、実践を続けていきたいと思う。

#### (5) 残された課題

今年度は、「子どもたち一人ひとりが興味・関心のあること窓口にして社会を知る」ということに重きを置いて実践を行ってきた。しかし、実際の社会では自分も含め社会の一員であって中心ではない。自分の興味・関心を中心として社会を見るだけでなく、自分に置かれた立場を理解して社会とつながることが、これから生きる子どもたちに必要なことと考える。

そのためにも、社会で起きている事実や新聞から見えてくるたくさんの人の考えに触れることが必要ではないだろうか。身の回りで起きる「小さな出来事」だけでなく、日本や世界で起きていることに目を向け、周りの友達とともに考え合う子どもたちになってほしいと考える。それが、今木島平小学校で学び木島平の未来を担う子どもたちに必要なことだと思う。